

豆句集



その四粒目
2014 年立夏号

目次

*俳句

花野 西村 遼 …2

地囃 梅津志保 …5

夕暮れ菟集 井上雪子 …8

*俳句+エッセイ

ひとり吟行 …12

郷里逍遙 西村 遼 …13

同じ朝 梅津志保 …14

歩いても歩いても 井上雪子 …15

*俳句

君たちの 吉野裕之 …16

豆句集



みつめ

豆句集 みつまめ
2014年立夏号(通巻第4号)

花野
西村 遼

瘦身の叔父整える注連飾り
大寒に砂の匂いのハガキ来る
群千鳥その各々の一呼吸
草枯れに束子ごろりとある平日
立つことは待つこと冬のバス停に
トラックは大吐息せり寒の月
冬晴れや重ねられたるアルミ鍋
朝霞会釈と思ひ会釈する
朽ちた門あければ鷗やがて海
森鼠ふいに花野に出て奔る

春砂塵話す前から泣いている
初雷にすくみつつ行く雨の丘
春の墓開けられてある缶コーヒー
遅き日や暴投空に吸われけり
花嫁はすたすた歩く野火のあと

地図

梅津志保

削られしまな板の香十二月
とんぷくの袋真白き冬日向
引き出しの奥のチケット春近し
春の雪折り紙の色選びけり

自転車のひとこぎ春に向かいけり
母国語の早口バレンタインデー
春日向城跡の地図広げけり
教室の地球儀回し卒業す
菜の花の水辺あかるき屋形船
摘み草や子犬のあくびひたすらに
しばらくは川鶉の潜る桜かな
引越しの挨拶回り春日傘
春の池四方にボートほどけゆく
呼び鈴の涼しき音よ夏館
円陣の高き拳や夏の空

夕暮れ蒐集

井上雪子

菜の花や記憶にない創うすすすと

卒業期ひかりを束ねゐて無言

蓬摘む背中に光あつまれり

公園ヲ抱イテ離陸ス朧月

夕暮れて視界やんはり春の富士

虚脱とふ語に前線の桜かな

桜蕊降る日の雲の白さかな

君が置く Bone China に射す五月

お揃ひのジーベックで行く青銀杏

夕暮れを蒐集する子や夏きざす

夕焼けやSHORT HOPEみじかい きばうを龍は吸ふ

夏帽子ひとつでAIR DO降りて来る

守宮ゐて花は眠るか眠らぬか

夏野からこどものままの声で来よ

立秋の夕闇すたとんと座りけり

お別れを言ふ場所までを秋のバス

予知夢の撃つやうに降る木の实かな

海のひと帰る家には萩の花

ラ・フランス夢みる権利が匂ひたつ

小春日や床屋に父を送りけり

丘に住む小さき声の子冬の草

ひとり吟行

西村 遼十梅津志保十井上雪子

句会で人とつながること、鑑賞で作品と向かい合うこと、

俳句の世界のとても大切な「座」。

でも、俳句を作るとき、最後は一人。

だから足もとをかためるために、あえて今、外へ出て、ひとり歩いてみよう。

対象との出会いと別れ。

二度と戻らない時に、ほろ苦さを感じる。

それでも十七音のリズムを身体に刻む。

ひとりひとり、毎日毎日が吟行。

ひとり吟行、

私たちは、前に向かって豊かな世界へどんどん歩いて行く。

●郷里逍遙◎西村 遼

木の芽どき、とわざわざ言われなくても体が知っている。そんな時は重い体を外へひきずり出し、いつもの川沿いをもくもく歩く。一定の距離を歩く事だけが、黒雲がかった頭の中に光を取り入れ、言葉の泥沼から意味あるものをサルベージすることが出来る。今この時は、もくもく歩く事が私の仕事だ。初めて曲がる角を曲がり、長く延びた道の曲がり角を体で感じ、へとへとになるまで歩く事で言葉はやっと形式を得る。

冬日さす川の曲率見て歩く

一月の川の青くて隣町

私の住む町は、空から見ると二本の大きな川と東西へ延びる大きな道が直交する狭間にある。昔から主要街道として栄えていた道の脇で何百年も狭い谷にへばりついていたような暮らしがあり、その上に宅地開発の波が押し寄せて出来た団地を私の親が買ったのはもう四半世紀も前のことだ。

歩く私の眼は、古拙な庚申塚、昭和の治水記念碑、鳶と一体化したグラフィティなど、それぞれの時代の風景のレイヤーが何層にも重なっている光景を見つけていく。その度に私の身体の記憶は更新され、私の中に、もう一つの町が日々生まれ直している。

●同じ朝◎梅津志保

三月のある晴れた日。家の近くにある動物園に向かった。動物園には、年に数回訪れる程度。しかし、日頃から動物に対して親近感を持っている。それは、自分の生活のそばで、ライオンやキリンも寝起きし、同じ季節を感じていると思うからだ。入場券を買い、ゆっくりと園内を歩く。子猿の愛らしさに人が集まっている。

子猿持つ枝先しなる春つらら

草萌えを飛び越えてきてカンガル

動物園の到る所で、「絶滅動物は人間の開発などによるもの。」という説明に

心が痛む。この動物園では、種の保存にも力を入れているらしい。いずれはそちらも見学してみたい。

動物園を後にし、同じ敷地内にある自然体験林に立ち寄った。ちょうど植物の観察会を開催していたので参加した。動物園とは違い、静かな森を歩く。片栗の花が咲いていた。咲くまでに八年かかり、明るい林を好むので下草刈りをするといふこと。こちらは人の手を必要としていて少しホツとする。

片栗や姉妹寄り添う午後があり

夕方になり、バスに乗った。今日も人、動物、片栗の花は、みな同じ地で眠り、生きる。そして同じ朝を迎えるのだ。

●歩いてても歩いてても◎井上雪子

学生の頃、夏休みになると長野県の国立公園に十日ほど泊まり込み、ゴミ拾いをしながら山道を一日中歩くというアルバイトをしていた。とても楽しかった。歩くのが仕事・・・、それこそが自分の適職または居場所だったのだらうと思う。けれど、高校でも大学でもまともに進路指導を受けなかった私は転職を繰り返してきた。吊革に縋りつき、パソコンに吸い込まれ、時々南の島や北極圏などへ緊急避難のような思いで歩きに出かけた。

だが最近、再び歩くことが仕事という

ような場所へ戻って来ることができた。それは心が柔らかく水分を含んで行くようなことではあったが、歩いてても歩いても俳句は気前よく浮かんで来ない。

私だけ見えてないかな青葉闇

人は見るべきものを選び、見たいものしか見せない。それでも見えているものをそのままに見ることが出来る身体性を持つ人、たとえば、野を歩く俳人たちは空や草花の光を集め、身体と心を呼応させ、言葉を意味から自由にしていくなのだ。

遠く春海が私の位置決めす

歩いてても歩いててもまた歩いて、透き通っていく場所へ向かおうと思う。

君たちの

吉野裕之



鶺鴒色のまま雛の日を過ごしけり

足伸ばすことの静かさチューリップ

八重桜らしくなつたとひとりごと

煙突の向かふの寺や夏はじめ

君たちの声大きくて薔薇の前

初めての梅の実といふやはらかさ

豆句集



豆句集 みつまめ

井上雪子

梅津志保

西村 遼

Producer * 吉野裕之

このファイルはホームページ配布版のため、
奥付の内容が印刷版のものとは異なります。



豆句集 みつまめ

2014 年立夏号（通巻第 4 号）

2014 年 5 月 5 日発行

発行所
みつまめ工房

website >> <http://homepage3.nifty.com/a-un/mitsumame/>

blog >> <http://819mitsumame.blogspot.jp/>

制作：アトリエ云 印刷：啓文社

定価：300 円（税別）